

MAPPS

Newsletter from MAPPS

頑張れ、ミュージアム。

No.21

2023.11



早稲田システム開発株式会社

東京都新宿区高田馬場4-40-17
TEL:03-6457-8585
<http://www.waseda.co.jp/>

CONTENTS

参加報告

デジタルアーカイブ学会
第8回研究大会

ミュージアムリサーチャー

作家の想いも
一緒に巡回する展覧会
『かがくいひろしの世界展』

イルフ美術館

ミュージアムリサーチャー

デジタルミュージアムに
住民の声を

宮古島市総合博物館
一般社団法人路上博物館

お知らせ

「I.B.MUSEUM SaaS インターフェイ
ス新旧比較」発行のお知らせ

「サステナブルなデジタルアーカイ
ブ」増刷のお知らせ

参加報告

デジタルアーカイブ学会 第8回研究大会

令和5年11月10日から11日まで、石川県金沢市でデジタルアーカイブ学会の研究大会が開催されました。今回は、業務の都合で1日目は出席できず、2日目の企画セッション『地域のアーカイブの構築と活用、人材育成 ～地域のアーカイブが、デジタルアーカイブを進めるにあたって～』からの参加です。当日は充実した発表の連続で、中でも「地域密着型のデジタルアーカイブは、住民が参加することで広がりを持続力を身に付けることができる」と実感できる事例の数々には、文字通り目から鱗が落ちる思いでした。

たとえば、富山県南砺市の『南砺市文化芸術アーカイブズ』では、NantoWikiというコーナーで旧8町村の町史・村史から文化・芸術まで多彩な情報が収録されているほか、フォームからは市民の投稿も受け付けています。石川

県加賀市の『かがが』も、Wikipediaの仕組みを活用して市民からの投稿がコンテンツを構成しており、地域おこし協力隊の方々が運営に関わっておられます。デジタルアーカイブの視点では「住民参加」はごく最近の取り組みのように感じますが、考えてみれば収録される情報には、もともと地域で語り継がれてきたものが多数含まれているはず。地元の方々が郷土の歴史や文化を伝承していくという構図は、IT以前もIT時代も変わらないわけですね。とすると、参加する住民の熱量が高ければ、それがそのまま事業存続の原動力となり、新たな参加者を呼び込んでいくことになるはずです。

その一方で、正確性の担保や新しい技術の採用といった要素が絡んでくると、専門性や予算が必要になります。地域住民の参加がカギを握ることが重要であると同時に、やはり行政の

力が重要となってくるわけです。その好例となる事例が、今回の研究大会の舞台である金沢市が最近公開した『金沢ミュージアム*(プラス)』です。市内の学芸員がコンテンツを準備し、3D AR化された同市の所蔵品アーカイブを紹介するデジタルコンテンツを収録したWEBサイトで、今後も最先端の技術を積極的に採用していくとか。どんな見せ方が登場するのか、今から楽しみになる出来栄です。

また、同市発の話題として、オープンデータポータルでの取り組みなども報告されました。地域住民のエネルギーと行政の組織力がうまく融合していけば、これからの地域のデジタルアーカイブはさらに面白いものになっていくはず。1日のみの参加でしたが、それでも収穫が多い研究大会でした。



デジタルアーカイブ学会 第8回研究大会
<https://taikai.digitalarchivejapan.org/8th/kikaku/>

南砺市文化芸術アーカイブズ
<https://culture-archives.city.nanto.toyama.jp/>

かがが <https://kagaga.jp/view/>

金沢ミュージアム*(プラス)
<https://kanazawa-mplus.jp/>



作家の想いも一緒に巡回する展覧会 『かがくいひろしの世界展』

イルフ童画館

出版から15年を経た今なお人気の大ヒット絵本『だるまさん』シリーズ(ブロンズ新社)をはじめ、『ふしぎなでまえ』『みみかきめいじん』(講談社)などの名作で有名な絵本作家の展覧会『かがくいひろしの世界展』が、長野県岡谷市のイルフ童画館で開催され、大成功を収めました。同展覧会では、ガイドアプリ「ポケット学芸員」で手話による解説動画も配信。これは見逃せない…ということで、担当学芸員の河西見佳さんにお話を伺いました。



長年の夢だった 展覧会

今年の6月15日から前後期に分けて開催され、計78日間の会期で何と約3万人もの来館者が押し寄せたという『かがくいひろしの世界展』。岡谷市の人口が4万7,000人ほどのことですので、その加熱人気ぶりがよく分かります。

わずか4年間の作家活動で16作品を発表したかがいひろしさんは、2009年に54歳の若さで急逝。没後初というこの回顧展は、イルフ童画館の開館25周年の記念企画として開催されましたが、実は同館では以前にも同様の展覧会を推進したことがあるそうです。当時在籍していた学芸員が中心となって企画を練り上げ、実際に遺族へと打診されましたが、他界からまだ日が浅かったこともあり実現には至りませんでした。

時は流れて、今回は絵本の出版社の主導で企画が進行。他館での実施から巡回展へと話が発展したことから、上記の経緯を鑑みてイルフ童画館にもオファーが舞い込みます。思わぬ形で再び熱意に火を灯す機会に恵まれ、念願かなって巡回展へ

の参画が決定。それも、栄えある皮切り役を任されることになりました。

50歳で作家デビューを果たしたかがいさんは、28年間にわたって学校の特別支援学級で教師を務めた経歴の持ち主です。一方のイルフ童画館も長野県諏訪養護学校と連携し、生徒さんたちが作ったお菓子やグッズなどをミュージアムショップで販売するなど多様な活動に取り組んできました。ともに障がいがある方々への理解が深く、しかも絵本を専門とする作家と美術館。こうして整理してみると、今回の展覧会は必然の再会のようにも感じます。



反響を呼んだ 手話解説動画

結果的に爆発的な人気を呼び、館はじまって以来という記録的な成功を収めた展覧会のあらましは各メディア報道に譲るとして、ここではこちらも大好評となった「ポケット学芸員」による解説配信を中心にご紹介します。

通常、複数のミュージアムを回る巡回展では、音声ガイドサービスは企画者側で用意するのが一般的。ところが、イルフ童画館では





すでにポケット学芸員の利用経験があったため、企画者側は配信するコンテンツの準備までを担当し、コンテンツの登録作業は館側が行うというやや変則的な役割分担となりました。

河西さんによれば、今回の展覧会は内部的にも非常に得るものが多かったとのこと。大きなポイントとなったのは、手話による解説動画の配信でした。

特別支援学級で教鞭を執っていたかがくいさんにもお喜びいただけるであろうこのサービスは、展覧会の成功に乗って想像以上に広く伝播し、多くの人々との出会いを生み出しました。たとえば、手話解説を見るために訪れたという3人の若者のグループは、全員が聴覚に障がいがある方々。河西さんも交じてスマートフォンのメモ帳機能を使いながらの会話を交わしつつ、その場で手話を習うなど、忙しい中でもひとときの交流を楽しんだそうです。

文字による会話が弾む一方で、ミュージアムのバリアフリーの実情に関する情報も。彼らの話では、ミュージアムの展覧会で手話解説が用意されているケースはやはり稀で、

そのせいもあってこれまでは美術館にあまり足を運ばなかった…とのこと。それを聞いた河西さんはショックを受けますが、手話動画を素直に喜んだ若者たちは展示を見て盛り上がり、その場で動画を撮影。持ち帰って編集し、後日「SNSにアップしてよいか」という確認のために動画持参で再訪してくれたことに感激したそうです。



真のバリアフリーの実現に向けて

それだけではありません。また別の日になりますが、手話解説動画の試みを聞きつけたのか、今度は長野県の聴覚障害者支援団体の方々が来館。河西さんが展示の解説を行ったところ、後日改めて手話通訳の方を伴って再来館されたそうです。これがきっかけで、別の企画展では手話通訳者と一緒に同館のコレクションである武井武雄の作品解説を行うことに。ここで、河西さんは「手話に通訳されることを想定した解説」の難しさを痛感したといえます。日本語と手話の間にはボキャブラリーに

大きな違いがあるため、手話にない言い回しはできるだけ平易な表現に置き換える必要があるからです。

このように、「手話解説動画がある展覧会」は、こちらの面でも予想以上の大好評に。メディアでは一般来館者の方々の様子が伝えられましたが、聴覚障がい者の方々からは「以前からファンだったが、ここまで魅力的な作家だったとは知らなかった」との感想が寄せられたとか。他館の展示などでも文字による解説は用意されていたはずですが、この方の場合には手話に翻訳したことで初めて「届いた」ことになるわけです。「これまで文字で解説を出しておけば間違いないと思っていましたが、それでは不十分だと知ることができて、大変勉強になりました」と河西さんは振り返ります。

以前より特別支援学校と交流してきたイルフ童画館の学芸員の皆さんも、常日頃から「障がいがある方々にももっと展示を楽しんでほしい」という想いは抱えていました。ただ、基本的に絵画作品が多いため、たとえば視覚に障がいがある方々に配慮した「触れる展示」などは現実的に難しく、解説の文字を大きくすることくらいしかできなかったそうです。何とか工夫したいけれど、どうすればよいのか分からない…。悶々とした日々が続く中、大成功となった展覧会で聴覚障がい者の方々にミュージアムとしての楽しさを提供できたことは、大きな自信につながったようです。

「ポケット学芸員のおかげで、『なんだ、頑張ればできるじゃない！』となりました」と河西さん。館の皆さんにとっても、障がいがある方々と楽しく触れ合うまたとない機会となったようです。アプリで情報を提供するだけでは届かない「真のバリアフリー」に向けて前進することができた…と満足げな表情を浮かべておられました。



心優しい若者たちの 気配りとは

もうひとつ、大きな出来事がありました。話題の主は前述した3人の若者たちなのですが、実は河西さんの理解に合わせて言葉や伝え方を選びながら話してくれたそうなのです。これは、今回のインタビューでも特に印象的なエピソードのひとつでした。

障がい者の方々に向けたサービスを考える際、一般的には企画する健常者側が「歩み寄り」という意識があるかと思います。しかし、今回は逆に「歩み寄ってくださっている」ことを肌で体験したことから、河西さんはご自身の視点がいかに偏っていたかを痛感されたとか。これは、先ほどの「手話に翻訳される解説の難しさ」とも通じるお話ですね。

日頃から手話が身近な人は、誰かと話す時には相手への気配りが習慣化すると聞きます。しかし、そうでない人は、細心の気配りで対話がスムーズになることを想像しにくいものです。それを初めて経験すると、自らの配慮不足に衝撃を受けるのも無理はありません。実は以前、筆者もほぼ同様のことを体験して打ちのめされたので、よく分かります。

この貴重な体験から、河西さんはそれ以降、子どもたちに解説する時にも各自の表情をよく確認するようになったそうです。同じ話をしても人によって感じ方はそれぞれですが、子どもは大人と違って分かりやすく反応するため、感情を読み取りながら話すことが増えたのだとか。また、大きな声を怖がる子がいれば、話が長引くと疲れてしまう子もいる…といった具合に個性の違いに注意を払ううちに、休憩を入れるタイミングなども変わってきたとのことでした。

こうした新しい気づきがあった日は興奮して眠れなくなるんです、と笑う河西さん。お邪魔した日はちょうど会期末だったのですが、あれだけ多くの来館者を迎えてなお、もっとたくさんの方とお会いして、もっとたくさんのお話がしたかった…と、終了を惜しんでおられました。



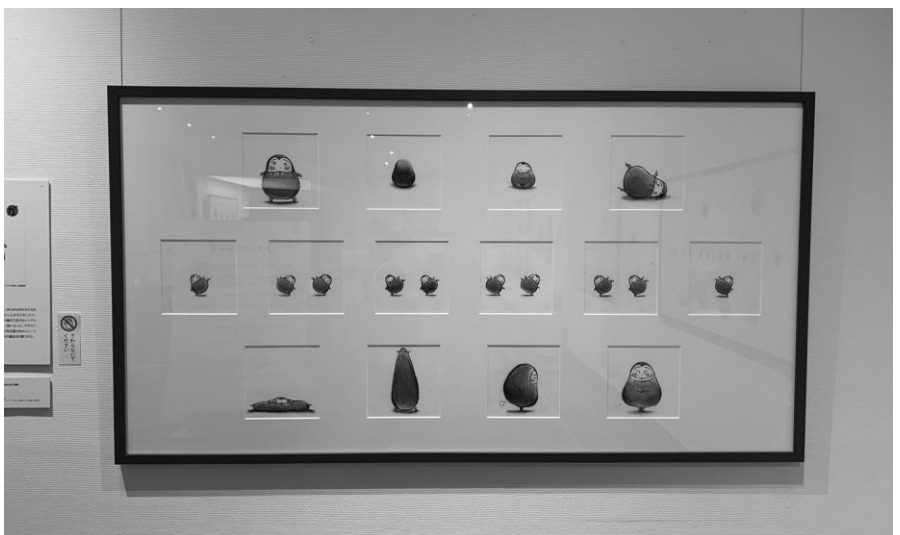
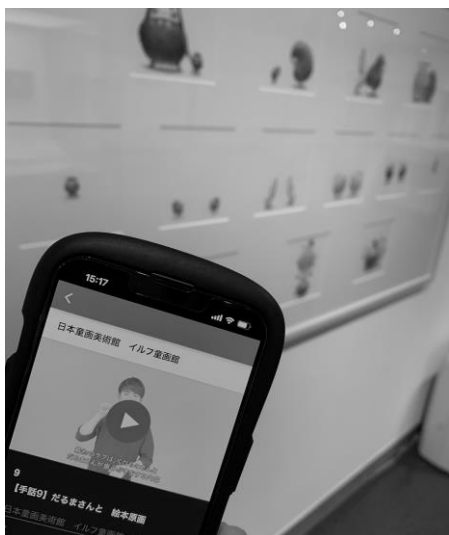
新たな縁、 新たなチャレンジ

前述の通り、今回の展覧会でポケット学芸員を通じて配信された手話解説の動画は、巡回展の主催者が用意したものです。館側は動画の制作自体には関わっていないのですが、今回の展覧会の大成功がきっかけ

となって、イルフ童画館では新たなチャレンジが始まりました。実は、館の所蔵作品にも手話による解説動画を作成・配信する計画が持ち上がっているそうなのです。

河西さんが体験されたように、語彙の違いに配慮した執筆が必要となる解説文の作成は難航するかもしれませんが、手話に関しては大丈夫でしょう。と言うのも、心強い味方がいるから。実は、前述の支援団体の方々が展覧会に感動し、協力を申し出てくださったというのです。展覧会がつかないでくれた素晴らしい縁ということで、双方に無理のない範囲で少しずつ進める方針とのことでした。

この日の館内はたくさんの来館者で賑わっていましたが、スタッフの皆さんは交代でカフェを手伝うほどの忙しさ。全国のミュージアムの共通課題となっている人員不足を思わせるシーンですが、それでも館運営について話し合う時には試したいことが次々と出てくるくらいのポジティブさ。その士気の高さは、さらなる手話解説動画の計画にも表れていますが、全体を総括して「開館以来最高の動員となっただけでなく、学芸員のモチベーションもグッとアップして、10歩も20歩も前進した気分です」と嬉しそうに話す河西さんが印象的でした。





実際の展覧会を鑑賞して

ひとしきりお話を伺った後、展覧会をじっくり拝見としましたので、最後にご紹介しておきます。

まず目に飛び込んできたのは、やはり『だるまさん』シリーズです。まだ言葉が話せない幼い子が自然と笑顔になるこの作品は、なぜこれほど魅力的なのか。その秘密には、併せて掲出されていた奥様の言葉で少し迫ることができました。

奥様によれば、かがくいひろしさんは「芸術家ではなくエンターテイナー」なのだそうです。もっと相手を楽しませて、もっと反応を引き出したい。その背景には、特別支援学級の教師を務める中で、重度の障がいがある子どもと向き合い続けた経験があります。子どもたちの笑顔が見たい…これはきっと絵本作家になる前からずっと取り組んでこられたライフワークなのでしょう。

作品の展示とともに、かがくいさんの言葉も掲出されていましたが、そこからもご本人の人の人柄が伝わってきました。たとえば、こんな感じです。

「子どもたちの喜びは、自分の喜びでした。それが絵本をつくる原動力になっています」「ハンディを持った子や小さな子どもにも受け入れられるものにしたいんです。どんなものなら興味を持ってもらえるだろうと考えたときに、思いついたのが『音』と『動き』、それから『見立て』。擬音語・擬態語って子どもの興味をひくでしょう。そこに単純な動きを掛け合わせると、さらにおもしろくなるんですよ」

こうした言葉を読み進めるにつれ、先ほどご紹介した河西さんの言葉が重なります。もっとたくさんの人に会って、もっとたくさんお話したい。彼女が展覧会を通じて感じたことは、かがくいさんがその作家人生の中で目指していたことと本質的に通じているのでしょう。つまり、この展覧会は、作家の想いを学芸員が引き継いで、すべて

の人々に向けて広げていく取り組みなのですね。かがくいさんの想いは、巡回展を通じてさらにたくさんの人に伝わっていくのです。

作品だけでなく作家の想いも一緒に各地を巡る、素晴らしい巡回展。そのトップバッターとなったイルフ童画館での開催は9月16日で終了していますが、9月30日から12月24日までは岩手県の花巻市博物館で開催されており、さらに高知県や兵庫県など2026年まで全国を巡回する予定です。なお、下記の展覧会のWebサイトには、ページの最後に本展を紹介する短い手話動画が用意されていますので、ぜひご覧ください。





デジタルミュージアム構築に向けた地域住民インタビュー

宮古島市総合博物館／一般社団法人路上博物館

コロナ禍を機に強まったデジタル活用ニーズを下敷きに、博物館法改正で一気に活発化する博物館のデジタルアーカイブ事業。すでに多くの自治体で文化資源情報をコンテンツに活用するデジタルミュージアムが次々と公開されていますが、今回お邪魔した沖縄県の宮古島市総合博物館もそのひとつ。より地域に愛される事業を目指す同館では、プロジェクトの準備の一環として島の住民の皆さんに対して「デジタルミュージアムについてどう思うか」というインタビューを実施しました。

デジタルミュージアムの第一の利用者は、ほかならぬ地元住民です。したがって、事前に人々の声に耳を傾けておくことは、長く親しまれるデジタルミュージアムづくりの有効な手段のひとつ。ということで、今回は館から委託を受けて実際の住民インタビューに臨んだ一般社団法人 路上博物館の齋藤和輝さんに、詳しくお話を伺いました。



できるだけ自然な会話 となるように

宮古島市総合博物館のデジタルミュージアム構築に向けての地域住民インタビューは、10月3日から5日にかけて市内各所で実施されました。取材対象は計7名で、年齢は20代から50代まで幅広く、職業も多様。宮古島での居住歴は短い方で約2年、長い方ではほぼ20年。島で生まれた方、移住してこられた方、さまざまなプロフィールの方を選出して協力を願ったそうです。齋藤さんによれば、実際のインタビューは基本的には1対1で、形式張らずざっくばらんに進められました。「島のどの地区にお住まいか」「どんなお仕事に就かれているか」「家族構成は」など基本的なことから始めて、趣味や現在の関心事などよりパーソナルな話題へ。ライフスタイルについての話が弾むうちに、デジタルミュージアムの話とはかけ離れた個人的なエピソードを披露してくださった方も多いうです。聞き手である齋藤さんは、常に笑顔で見

るからにお人柄がよく、話術も巧み。しかし、それ以前に、相手が話しやすいリラックスした空気づくりに気を配ります。インタビューと言っても、訊ねる・答えるの繰り返しではなく、打ち解けて互いに会話を楽しむ雰囲気になると、「そう言えばこんなこともありまして…」と相手のほうからすすんで話題を広げてくれたり。一見はインタビューの主旨に関係ないようなお話でも、ご意見の真意につながっていくことしばしばとか。



たとえ短い時間でも 信頼関係を大切に

目的である質問への回答に対し、その方の背景情報が添えられれば、同じ答でも少し奥行きが出てきます。こうしたインタビューは終了後に内容を振り返り、レポートなどにまとめて報告することになりますが、この時の考察に役立つのです。なぜそう思うのか、そう感じるのか…と踏み込んでいく際、その答に辿り着く動線を辿りながら「こういうバックボーンを持つ人はこ

んなニーズを抱きがち」という仮説を立てます。インタビュー対象の人選も同様で、多様な方の多様な考えを集約することで、地域全体のニーズを浮かび上がらせていきます。できるだけ広く、できるだけ奥行きを持たせてお話を伺っても回答に一定の偏りが見られれば、それはまさに「地域住民の声」となるわけです。

さて、齋藤さんのお話に戻しましょう。話題は徐々に核心へと近づき、普段の博物館との関わりについて訊ねます。こうしたインタビューでは、行政に関わるプロジェクトとなると必要以上に厳しい目線になったり、逆に目の前の相手を気づかって無難な答を選んだりしがちになるものです。しかし、ここまでの会話でしっかり信頼関係を作り上げている真摯なインタビュアーに対しては、皆さん安心して本音を語ります。

齋藤さんによれば、たとえば「ふだん博物館に行くかどうか」という質問では、ひとつの傾向が見られたそうです。「移住者は引っ越してすぐに足を運ぶ」「島の出身者は小学生の時に見学に行っていて以降は足を運ばない」という像が明確に浮かんだと

いうのです。理由については敢えて質問するまでもなく、一連の受け答えの流れで触れられます。なぜ出かけたのか、なぜ出かけないのか。アンケート用紙に文字で書く時とはひと味違うリアリティに満ちた回答が、博物館にとっては貴重な「利用者の肉声」となるのです。



デジタルミュージアムをどう思っているのか

さて、ここでひとつ余談を。ふだん博物館に出かけない人々は、地元の歴史や文化を知りたい時はどうしているのでしょうか。今回のインタビューでは、多くの方が複合施設の中にある図書館の郷土資料コーナーを利用していることが分かったそうです。その施設は立地がよく、資料も多いからか、かなり身近な存在となっているとのこと。そのほか、身近な年配者らに直接話を聞くという人もいるなど、インターネットにそこまで頼り切ってはいなさそうな様子。スマホ時代を考えれば少し意外と言えるかもしれませんが、このあたりに今回のデジタルミュージアム構築のヒントが隠されていそうな気配も。

そして、今回のインタビューの焦点へ。「これからデジタルミュージアムができるとしたら、どんな期待を抱きますか？」。唐突に

訊かれていたらイメージしづらく答えにくい質問にも、活発な意見が出されます。「過去に見た展覧会がアーカイブされていて、いつでも見ることができたら」「現在までの島の出来事をカレンダー化して、『今日は何の日』と示して欲しい」「島の歴史や文化について詳しく調べられるデータベースであって欲しい」。上手にインタビューを進めれば、こうしてそのまま会議に提出できるような、具体的に熱量も高いご意見を伺えるのです。



地域住民のニーズをどう反映していくか

齋藤さんが所属する路上博物館では、これらのインタビュー結果をさらに深く分析し、「住民が望むデジタルミュージアム像」を明らかにしていく予定とか。今回のインタビューの具体的な質問や回答の詳細に触れることはできませんが、齋藤さんへの取材でひとつ勇気づけられたのは、住民の方々は想像以上に「地元について知りたい」「楽しみたい」という想いを抱いていたことです。皆さんの本音の部分は、こうして膝を交えた対話の中からしか知り得ないこともかもしれません。

日常の中のどこにデジタルミュージアムが

置かれていたら使いやすいのか、どんなコンテンツが用意されていれば満足度が高いのか。ミュージアム内での議論も重要ですが、実際に使っていただく方々の中に飛び込んで生のご意見を伺えば、イメージの解像度はグッと上がります。実際のサービスの輪郭が見えるだけでなく、企画中のコンテンツの内容にも自信を深めることができるでしょう。

なお、今回のインタビューは、一部で博物館職員も同席されたそうです。つまり、企画者と利用者が互いに顔を見たことになりませんが、「このコンテンツなら、あの方に喜んでいただけそうだ」と思いながらプランを磨くことができれば、デジタルミュージアムはより血の通ったものになっていくに違いありません。もちろん、すべての方の意見を反映できるわけではありませんが、うまく「住民参加」の側面を確保することができれば、地域みんなで末長く育てていくデジタルミュージアムに繋がっていくのではないのでしょうか。



宮古島市総合博物館
<https://www.city.miyakojima.lg.jp/soshiki/kyouiku/syougaiakusyu/hakubutsukan/>

一般社団法人路上博物館
<https://rojohaku.com/>



「I.B.MUSEUM SaaS インターフェイス新旧比較」発行のお知らせ

すでにお知らせしております通り、I.B.MUSEUM SaaSは近くインターフェイスの全面リニューアルを予定しております。弊社では、以前よりニュースレター「I.B.MUSEUM SaaSリニューアル情報EXPRESS」などを通じて、開発中のリニューアルの最新情報をお届けして参りました。そして、開発が大詰めに近づき、デザインやレイアウトが確定した画面も増えてきたことから、進行中の一部を除いて、現行画面と新画面の違いを具体的に比較しながらのご説明が可能となりました。

そこで、新旧の画面を並べて変化のポイントを解説する冊子『I.B.MUSEUM SaaS インターフェイス新旧比較』を制作いたしました。一度にすべての画面についての資料をお送りすると大量のボリューム

となってしまいますので、ニュースレターと同様に、数回に分けてお届けとさせていただきます。現在ご契約中のユーザ館の皆様には、すでに第1弾をご送付しておりますが、ご覧いただきましたでしょうか。

なお、この冊子の内容は、I.B.MUSEUM SaaSのロードマップのページ(※1)にも掲載しております。操作マニュアルに近い性格となることから、印刷版はご契約館にのみお配りしておりますが、体験版をご利用の皆様にもWEB上でご覧いただけます。また、印刷版は、実際のPCの画面をご覧になりながらお読みいただけるよう、A4横開きの体裁としております。そのままでは綴じにくい体裁かと存じますので、ファイリングをご希望の場合も、同様にロードマップページからアクセスの上、

ダウンロードしてご活用ください。

さらに、この新旧比較資料の掲載機能は、実際にシステムを操作した参考動画も制作しております。こちらがI.B.MUSEUM SaaS動画チャンネル(※2)にて公開しておりますので、併せてご覧ください。

※1 I.B.MUSEUM SaaSロードマップ
<https://welcome.mapps.ne.jp/products/roadmap>

※2 I.B.MUSEUM SaaS動画チャンネル
<https://welcome.mapps.ne.jp/movie>

いずれも、ログイン後にご覧いただけるページです。



「サステナブルなデジタルアーカイブ」増刷のお知らせ

博物館法の改正を機に、ミュージアムのデジタルアーカイブに対する意識は高まる一方ですが、そんな中で昨年9月に発行いたしました特別編集冊子『サステナブルなデジタルアーカイブ』には、発行から1年以上を経過したいまもお問い合わせをいただいております。もとより、この冊子は、これから誕生するデジタル

ミュージアムが持続可能なサービスとして末長く存続することを願って発行したものです。現在進行中のプロジェクトに関わっておられる皆様にはぜひお届けしたいと考え、増刷することといたしました。まだお手元にお持ちでない場合は、ぜひお申込みください。



編集後記

今回ご紹介した3本の記事は、いかがでしたでしょうか。『かがくいひろしの世界展』の取材では、手話動画配信を通じてミュージアムと聴覚に障害を持つ方々、支援する方々との繋がりが広がっていく様子を垣間見ることができました。デジタルミュージアム構築に向けての住民インタビューの取材では、市民の方々の本音を上手に聞き出し、地域が本当に必要としているコンテンツの開発に役立てることで、公開後の住民との繋がりにさらなる期待が持てそうな展開に。そして、冒頭の参加報告で記載したデジタルアーカイブ学会での発表も、まさに住民との繋がりに成功した好事例が多数紹介され

ていました。特別に意図したわけではないのですが、今回の記事は3本とも「ミュージアムと人の繋がり」の大切さを改めて考える内容となりました。運営者も、職員も、利用者も、行政関係者も、ミュージアムは常に「人との繋がり」で成り立っています。リアル世界のサービスにせよ、オンラインでのサービスにしても、持続と発展には人と人の繋がりから生まれるエネルギーが不可欠です。デジタルアーカイブ構築への気運が高まるいま、今回取り上げさせていただいた記事のような事例が増えることで、日本のミュージアムの未来がさらに明るさを増していくことを願ってやみません。

